

初代教会において、ギリシア語を話すユダヤ人たちから、ヘブライ語を話すユダヤ人たちに食事のことで不平等に扱われていると訴えがありました。そこで、ギリシア語を話すユダヤ人たちのお世話係として執事が選ばれました。その中でも特に知恵と霊に満ちたステファノは、ユダヤの民衆の間に出かけて行ってすばらしい不思議な業とするしを行っていましたが、イエス・キリストを信じていないユダヤ教の人たちはステファノの働きをねたみ、彼を捕らえて最高法院に引き出し、嘘の証言でステファノを陥れようとしていました。ところが、引き出されたステファノの顔はさながら天使の顔のように輝いていたと聖書は証言します。ステファノは、最高法院というイスラエルでもっとも権威ある場所でイエス・キリストの福音を語る機会が与えられたこと、そしてそのように最高法院に引き出されて証言しなければならなくなっても聖霊が語る言葉を導いてくださるというイエス様の教えに従って喜びあふれていたのです。聖霊は、それまでステファノが心の内にたくさんためておいた御言葉を、必要に応じて自由に導く出してくれます。また、それまでステファノが蓄えてきた祈りによって、聖霊の導きに従って語るべき言葉が整えられていくのです。

こうして最高法院に引き出されたステファノが語った福音が、使徒言行録7章の2節から53節まで続いています。ステファノはこの説教を、旧約聖書の証言に基づいて語っていますが、私たちはこの説教を3週にわたってご一緒に聴いていきたいと思えます。

今日はまず、7章2節から29節までの箇所です。そこには、神様が最初に選んでくださったアブラハムとその息子のイサク、イサクの息子で後に神様からイスラエルという名前をいただいたヤコブ、そしてエジプトの宰相にまで上り詰めたヨセフ、それから400年後にエジプトの奴隷となっていたイスラエルの人々を解放したモーセに至るまでの流れがごく簡単に記されています。

アブラハムは、神様が最初に選んでくださったイスラエルの信仰の祖であります。彼は、キリスト教の基でもあり、ユダヤ教、そしてイスラム教の始祖でもあります。2節には、アブラハムがまだメソポタミアにいたころと記されています。アブラハムが生まれたのはメソポタミアのウルという町で、今のイラクの南部の地方で、イランとクエートに挟まれたような場所になります。そこから、アブラハムの父であったテラがハランに移住します。ハランは現在のトルコの南東部で、シリアと国境が接しているようなところになります。創世記12章1節以下には、アブラハムがまだアブラムと呼ばれていたころ、父のテラに連れられてハランに移住したアブラムに神の言葉が臨んだと記されています。けれども、今日のステファノの説教では、「わたしたちの父アブラハムがメソポタミアにいて、まだハランに住んでいなかったとき、栄光の神が現れ、『あなたの土地と親族を離れ、わたしが示す土地に行け』と言われました」と記されています。この違いは、ステファノが間違えたのではなく、創世記15章7節に「わたしはあなたをカルデアのウルから導き出した主である」と記されていますので、アブラハムが父テラに連れられてハランに移住する前、まだメソポタミアのウルにいたころに、すでにアブラハムに神様の召命が臨んでいたとステファノは理解したのでしょう。それでは、アブラハムはなぜ神様に選ばれたのでしょうか。彼が立派な信仰を持っていて、神様に忠実に歩んでいたからでしょうか。創世記には、残念ながらそのようなことはまったく記されていません。アブラハムが神様に選ばれたのは、それはただ神様側からの一方的な選びであって、アブラハムの側には選ばれる理由など、

どこにもなかったのだと私は思います。けれども、アブラハムのすばらしかったところは、特別に選ばれる理由のなかったアブラハムを選んでくださった神様に、彼が従っていったことです。イエス様から選ばれた弟子たちもそうでした。「人間を取る漁師にしよう」とイエス様に招かれた弟子たちも、彼らのうちにはイエス様から選ばれる特別な理由はありませんでした。イエス様はむしろ、選ばれる理由のない小さな者たちをお選びになりました。それは、コリントの信徒への手紙一の1章29節に記されているように、選ばれた者たちが誰一人として、神の前で自分が選ばれたことを誇ることをしないようにするためです。選ばれた者が優れていたのではなく、むしろ優れていない者たちを選んでくださり、用いてくださる神様こそがほめたたえられるべきである。そして信仰とは、何の理由もなく選ばれた者たちが、神様のその招きに応じて従っていくことなのだと私は思うのです。同じように、アブラハムも神様から選ばれ、神様に従って行先も知らずに出かけていきました。思えば私たちも、今から半年前、何も知らないこの神戸の垂水にやってきました。

神様に従っていったアブラハムは、財産も、土地も、何も持たずに、神様の約束の地であるカナンの地に出かけていったのです。

そのようにしてカナンの地に移り住んだアブラハムでしたが、アブラハムと妻サラの間には、高齢になってもまだ子どもが与えられていませんでした。ところが神様は、創世記15章でまだ子どものいなかったアブラハムに向かって、あなたの子孫を天の星ほどに増やすと約束されました。また創世記17章で神様は、アブラハムとの間に契約を結ばれます。その契約の内容は、約束の地カナンをアブラハムの子孫に与えることと、神様がアブラハムの子孫の神様となってくくださるという約束でした。この土地の所有に関する約束は、今もイスラエルにおいてガザ地区での問題など、たいへん大きな問題をはらんでいますので簡単に語ることはできませんが、ここでは土地所有の約束というよりもむしろ、神様が子々孫々に渡って彼らの神となると約束してくださったことが重要であると理解しておきたいと思います。そして今日の聖書の箇所、使徒言行録7章6節において、神様は400年間の奴隷生活を預言されます。創世記15章13節には、まだ子どもが与えられる前のアブラハムに神様がこのように語られたことが記されています。「よく覚えておくがよい。あなたの子孫は異邦の国で寄留者となり、四百年の間奴隷として仕え、苦しめられるであろう。しかしわたしは、彼らが奴隷として仕えるその国民を裁く。その後、彼らは多くの財産を携えて脱出するであろう。あなた自身は、長寿を全うして葬られ、安らかに先祖のもとに行く。ここに帰って来るのは、四代目の者たちである」。神様はこの約束通り、エジプトの奴隷からイスラエルの民を解放し、約束の地カナンへと導いてくださいました。出エジプト記に記されている通りです。さて今日の聖書の箇所、使徒言行録7章に戻りますと、創世記17章に記されているように、神様はアブラハムと割礼による契約を結び、その息子であるイサクと孫のヤコブが与えられ、ヤコブには十二人の子どもたちが与えられ、その子どもたちがイスラエルの十二部族となってイスラエル民族を形成していきます。

9節からは、ヤコブの十一番目の息子であったヨセフの話が出てきます。ヨセフの物語は16節まで記されている通りですので、そこを讀んでいただければよいかと思います。ただ、ヨセフに関して一つだけお話しておきますと、創世記39章にはヨセフの人生でもっとも悲惨な時期のことが記されています。兄弟たちにねたまれてエジプトに奴隷として売られていったヨセフは、ポティファルという主人の家で奴隷として仕えますが、そこで主人であったポティファルの妻に言い寄られた際に拒んで逃げ去ると、その妻が腹いせに、

ヨセフにいたずらされると主人のポティファルに嘘の証言をし、奴隷のヨセフはそのまま牢屋に入れられてしまいます。エジプトに奴隷として売られてきただけでなく、主人の妻の嘘の証言によって牢屋に入れられてしまったヨセフ。創世記39章は、ヨセフの人生の中でもっとも悲惨な時期、どん底の時代と言えるでしょう。けれども、ヨセフにとって暗黒の時代ともいうべきこの創世記39章には、驚くことに「主が共におられ」という言葉が4回も出てくるのです。最初の2回は、ヨセフがエジプトに奴隷として売られてきたとき。主が共におられ、ヨセフのすることをすべてうまく計らわれたので、主人のポティファルは家の管理をすべてヨセフの手に委ねます。最後の2回は、妻の嘘の証言によって牢屋に入れられたとき。主がヨセフと共におられ、恵みを施すようにされたので、看守長は監獄の囚人をみな、ヨセフの手に委ねられたと記されています。ヨセフの人生でもっとも悲惨な時代に、主はヨセフと共にいてくださった。このように、私たちの神様は、私たちがいちばん苦しい時にこそ、共にいてくださるお方なのです。

今日の聖書の箇所17節以降は、モーセについてのことが記されています。ヨセフはエジプトで宰相となります。そのころ、その地方にたいへんな飢饉が起こり、食べる物に困ったイスラエルの人々は、ヨセフを頼ってエジプトに移住しました。その後、ヨセフのことを知らないエジプトの王の時代となり、神様が預言されたように、400年の間イスラエルの人々はエジプトの奴隷となって苦しい生活を強いられます。それでも、増え広がっていったイスラエル民族に脅威を感じたエジプトの王は、生まれたばかりのイスラエルの男の子を川に投げ込むように命じます。このとき生まれたモーセは川に流されますが、エジプトの王ファラオの娘である王女に拾い上げられて、王の家で育てられます。23節以下には、そのモーセのエピソードが記されています。イスラエル人として生まれたモーセは、自分の中ではイスラエル人としての自覚がありましたので、イスラエル人を虐待しているエジプト人を撃ち殺してしまいますが、それを見たイスラエル人は、モーセのこゝを受け入れるどころか、自分たちもあのエジプト人と同じように殺されてしまうかもしれないと考えます。こうして、イスラエル人に受け入れられなかったモーセは、ミディアン地方に逃げていくのです。

なぜモーセはイスラエル人に受け入れられなかったのでしょうか。それは、生まれたばかりのモーセがエジプトの王女に拾われ、エジプトの王室で育ち、エジプトの優れた教育を受けたからなのでしょう。いくらモーセが、自分はイスラエルの出身だからイスラエル人の味方だと思っても、そのような環境で育ったモーセをイスラエルの人々は受け入れてくれなかったのです。モーセは、イスラエル人には成れませんでした。そして、エジプト人にも成れませんでした。そこで彼は、エジプト人の土地でもなく、イスラエル人が住んでいる地域でもない、どちらの民族もないミディアン地方に逃げていくのです。神様は、そんなモーセを御自分の働きのために選んでくださいました。その様子が出エジプト記3章に記されていますが、エジプト人から虐待を受けていたイスラエルの民を奴隷から救い出すために、神様がモーセを遣わすと命じた際に、モーセはこう答えます。出エジプト記3章11節、「わたしは何ものでしょう。どうして、ファラオのもとに行き、しかもイスラエルの人々をエジプトから導き出さねばならないのですか」。モーセはここで、神様からの召命に応えることができないと断っているのですが、その背景には、エジプト人でもイスラエル人でもない私が、どうしてそんな働きをしなければならないのですか、という問いがあります。言い換えると、モーセはここで、自分はいったい何者なのかという問いを

神様に向かって発しているのです。イスラエル人でも、エジプト人でもない私は、いったい何者なのでしょう。自分の立ちどころを、自分のルーツを尋ねるモーセに向かって、神様はこう応えるのです。出エジプト記3章12節、「わたしは必ずあなたと共にいる。このことこそ、わたしがあなたを遣わすしるしである。あなたが民をエジプトから導き出したとき、あなたたちはこの山で神に仕える」。イスラエル人でもない、ましてエジプト人でもないモーセが、自分はいったい何者なのかと神様に向かって問うたとき、神様はこう応えられたのです。あなたは、イスラエル人でなくてもいい。エジプト人でなくてもいい。私は必ずあなたと共にいる。これこそが、あなたのしるしである。エジプトで奴隷だったときは、神ではなくエジプト人に仕えていたあなたがたは、エジプトの奴隷から解放されたとき、この山で神に仕える。まことの神の民となるのだ。モーセは、イスラエル人としてもエジプト人としても受け入れられませんでした。そんなモーセを神様は、イスラエル人でもエジプト人でもなく、神に仕える民、神の民として、神様が共にいてくださると約束してくださったのです。

さて、今日の説教題は、「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」とさせていただきます。出エジプト記3章の初めの方で、神様が燃え尽きない柴の中に現れてモーセに召命を与えた際に、神様は御自身のことを、出エジプト記3章6節でこう呼んでおられます。「わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」。また同じ出エジプト記3章で、イスラエルの人々に遣わされていくモーセが、イスラエルの人々からあなたを遣わした神様の名前は何というかと問われたらどう答えればよいでしょうかと尋ねた際に、神様はこう応えておられます。出エジプト記3章15節、「イスラエルの人々にこう言うがよい。あなたたちの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主がわたしをあなたたちのもとに遣わされた。これこそ、とこしえにわたしの名。これこそ、世々にわたしの呼び名」。このように、神様は御自身のことを、「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」という言い方で表されるのです。

「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」。この呼び方は、特に旧約聖書においてイスラエルの人々が神様のことを表す言い方になっています。そしてこの言い方は、イスラエルの神様は単なる机上の神ではなく、想像上の神でもなく、実際にイスラエルの先祖の神様であることを表しています。アブラハムに現れ、彼を祝福の基とし、アブラハムの息子イサクをアブラハムの約束の継承者とし、イサクの息子ヤコブにイスラエルという名前を与え、イスラエル12部族の基としてくださった神様。実在する歴史の中で、自分たちの先祖を選び、祝福を与えてくださったあの神様、あの神様こそが私たちの、私の神様なのだ。この呼び方には、そんな意味が込められているのだらうと思います。

私たちがこの神戸西教会に来て、ようやく半年が過ぎました。この神戸西教会は教会組織から43年の歴史を持っています。この教会の歴史の中で、その時々に応じてここで働いてこられた方々がおられます。神様はそのお一人お一人に現れてくださり、そのお一人お一人を選んでくださり、そのお一人お一人に祝福を与えて神様の御用のために用いてくださいました。その神様、あの時あの人に働いてくださったあの神様こそが、私の神様なのだ。私たちも、そんな意味を込めて「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」、この神様を第一とする信仰生活を送っていきたくて願います。

お祈りしましょう。